

みそ作り講習会

2月23日(木)生憎の天気の中、6人の方が味噌づくり挑戦。まると館で三度目となります。

当日、使い捨て時代を考える会より田頭千鶴子さんと安井富子さんに来ていただき、ひとつひとつ教わりながら、楽しいひとときを過ごしました。

家で煮て来られた大豆をビール瓶でつぶします。大豆の形がほぼなくなったら、そこに分量の塩と麴をいれます。乾燥麴なので大

まるごと館 2・3月の講習会の紹介です

豆の煮汁を適量入れて良く混ぜ、麴に水分を吸わせます。

結構たつぷり煮汁を注いでも30分置くと麴は随分ふくらんで丁度良い頃合いです。皆さん重石

のための小石を探して、熱湯で煮沸して来られました。田頭さん

に小石とバランの扱いを教えてくださいいただき、皆さん大満足で嬉しそうでした。きつと美味しい味噌ができるこ



とでしよう。お昼を共にし、楽しい時を過ごしました。田頭さん安井さんありがとうございました。

おひなさまコンサート

3月3日(土)午後1時より伊佐昭代さんに来ていただきました。



お孫さんのひな祭りもあつたのに、快諾してくださいました。「おぼっちゃん」をはじめ7曲歌われ、そのうちの「風よぶるさとよ」は3月11日の震災の被災者の方の詩に曲をつけられたものでした。この歌をうたうと、いつも涙ぐんでしまうと言われます。いつも伊佐さんの歌は詞が素敵で、とても澄



んだ声が魅力です。それが終わり、「皆で歌いましょう」では声を出すためのウォーミングアップのために「幸せなら手をたたこう」や「早口言葉」の歌をうたいました。体も動かして楽しめました。ひな祭りや春の歌を大きな口を開けて、全員で歌い、最後は「故郷」でした。

八幡まるごと館便り

2012年4月1日 28号

<発行> 八幡まるごと館

八幡市男山松里 12-20

TEL・Fax 983-3664 (9時~17時30分)

Eメール yawata@marugotokan.com

毎週火曜日は休館です。まるごと館は使用していただくことができます。ご相談ください。
*野菜販売も火曜日休みます。



故郷と震災の八幡まるごと館 4月・5月の予定 火曜日は休館です(5月1日〜5月5日は休館) ことが脳裏に浮かんできました。

参加者も多く、とてもいいコンサートになりました。

伊佐さん本当にありがとうございました。

楽しい理科の実験。



綿菓子作り

2月10日(金)

今回で最後となりました。綿菓子を作るために、何から何まで手作りです。アルミ缶の下の方に細かい穴を開け、そのアルミ缶をモーターで回転させて、底をアルコールランプで熱する。段ボールの内側にアルミホイルを貼ります。



春のまわし市

パッチワーク講習会 月の第1金・第3金の予定です
4月6日(金) 20日(金) 10時〜11時30分 3月の続きです。参加費100円
5月20日(日) 10時〜15時 フリーマーケット等募集致しますのでよろしくお願い致します。



に砕いて穴の開いたアルミ缶に入れてみました。アルミ缶の回転数によって出来は色々でしたが、いろんな味の綿菓子がうまくなりました。理科の実験、名残惜しいかぎりです。木下さんありがとうございました。またの機会があれば嬉しいですね。

フラワーアレンジメント

2月17日(木) 10時〜 参加者

7名と少なかつたのですが、明るい色の花々に心満たされました。

パッチワーク講習会

3月2・9日(金)

講師は松本則雄さん(枚方市)。



もう20年パッチワークに取り組んでおられます。まるごと館内にある心学塾作業所(枚方)の商品を作っておられて、それで教えていただくことになりました。快く引き受けていただきました。

参加者は針に慣れてお



あんなこと・こんなこと

*前号の続きです。新聞記事「死者思わずして復興なし」(山折哲雄さん1月18日の日経夕刊)より。

『今、絆の大切さがいわれている。しかし、それは、あくまでもボランテニアとか、助け合いとか、生きている者同士の絆です。しかし津波に流された人と生き残った人との絆は、回復されたのだからか。先祖や、死者に対する万葉以来の感覚、死者の魂の行方に対する想像力は、現代人に欠如している。』

人々金とものは、東北にまだま



られる方が多く、手際良いです。時折聞こえてくる講師の松本さんの叱咤激励(?)が楽しくて、そのうち、自分が言われたりしますと笑えませんが、丁寧に教えて下さいます。楽しい時間です。基本的には月の第1と第3金曜日に行います。



だ流れていくだろう。しかし、その流れは、いずれ止まる時が来る。その時どうするのか。戦後、われわれは、いかに生を全うするかばかり見えてきて、死者や先祖のことを置き去りにしてきたのではないか。近代化の陰に埋もれてしまった死者との魂の関係を回復しなければ、復興はありません。』

考えてもなかったことなので、理解しようとして山折さんの本を何冊か求めた。「…巨大地震に巻き込まれ、自分だけが生き残り、身近な人が亡くなって行く。なぜ、あの人が死んでしまい、自分一人が助かったのか、納得のいく説明などできない。不条理としか言いようのないことが生じるわけです。比喩的ではなく、宗教的な災害であるというほかはない。」(救いとは何か 筑摩書房)

そして、東北の地が持つ独特のちからにも思いをよせてみようと思っています。

宮澤賢治の「世界ぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」。この言葉が東北に浸透しているのでしょうか。そういう感じがします。

(うえたにじゅんこ)